

「愛猿記賞」【佳作】

「子母澤寛氏の心」

北海道 金泉 三恵子

古書店で手にした一冊の本。「愛猿記」昭和63年文春文庫出版で、初版本なのだ。作者は子母澤寛氏。黄ばんだ一冊の本との出会いが、私の人生を変えた。

現代はペットブームである。多数出版されている本の中で、猿を飼う本は見た事が無い。まして「愛猿記」は、昭和31年に文藝春秋新社から出版されている。今から61年以上も前の話なのだ。驚きを感じる。

この本は、決して人前で読めない。感動で涙が止まらなくなるからだ。

「お別れのお経はおれが上げてやる」

「猿よ。お前もおれもみんな仏様の御前に集まるのだ。お前、もう少しの辛抱だ。待っているよ。またきっと逢えるからなあ」

猿が死んだ時は、法華経の寿量品を唱え、成仏を御祈念する。

この愛は、どこから来るのだろう。

子母澤寛氏は、明治25年・北海道厚田村に生まれた。生後まもなく父母との別離があり、祖父母に引き取られ、祖父に溺愛されて育っている。幼な心に刻まれた父母のいない悲しみ。淋しかったことだろう。祖父の愛情に包まれていたから、救われていると、思う。

人間の心の中には、光と影が存在している。光は愛・喜び。影は悲しみ・嫉妬。

子母澤寛氏にとって、父母との「別離」が心の影となり、祖父の「愛」が心の光となっていると、私は感じる。「三つ子の魂百まで」の言葉があるように。

この世の最大の悲しみ。それは、死別。生を受けた者は、必ず死を迎える。逃れることの出来ない別離。別れの悲しみを知っている。「どうしてもやれない事のあるのを」身を持って、経験している。

「猿を飼う以上、一生もんだという決心が必要なんですね。人間と同じですから」

猿の命も心も人間と同じであると語る、子母澤寛氏。

「サルを愛しサルに愛されるうれしさ」を心の光として、心の影である別離の悲しみと、全身全霊で対峙する。まさに、真剣勝負である。

「愛猿記」は、単なる人間と猿との愛情交流本ではない。

この世での闘いが終わって死を迎えると、成仏を祈り、来世での再会を願う。心を死に奪われるのではなく、来世にまで愛をつなぐのだ。子母澤寛氏の深い愛を感じる。

私は、いけばな作家である。縁あって手元に来た草木・花の命を頂いて、作

品を表現している。「この顔を見て」と、花が催促する。花にも心があり、一番素適に見える姿を見つけて欲しいのだ。全身全霊で対峙する。命を無駄にしないように。

「愛猿記」を読んで、私は、死に向かっている命を、真剣に考えるようになった。66歳で難病を抱える私に、残された時間は限られている。この世で縁ある人・犬・亀・花の命に感謝し、愛を尽くして生きて行きたい。